

サッカー（フットボール）の誕生

西田 裕之

Hiroyuki Nishida

1、はじめに

本稿は、平成24年8月4日（土）奈良産業大学オープンキャンパス模擬講義の内容を加筆・修正したものである。この日は、ロンドンオリンピック期間中であり、それに関連した表題ということで、日本サッカー女子代表チーム（なでしこジャパン）が昨年のワールドカップ優勝に続いて、オリンピックでも金メダル獲得の期待が高まっていたことと、筆者の研究テーマである「サッカーの戦術分析」の根本でもある「サッカーの誕生」について再認識するため、このテーマに決定した。

サッカー（soccer）は、正式名称：「Association Football」の俗称で、「Association」の第2音節「soc」に人を意味する「er」をつけ「soccer」となった。しかし、現在では、サッカーの名称が通じるのは日本とアメリカぐらいであり、英語圏の国々では「フットボール（Football）」の名で親しまれている。しかし、本稿では、敢えて日本で馴染のある「サッカー」の名称で呼ぶ。

サッカーは、他の競技では類を見ない「手を使ってはいけない」スポーツである。人間にとって一番器用に動かせるのは手である。その手を使ってはいけないということがサッカーを難しく、そして、魅力あるスポーツに仕立て上げた。足を中心に手以外を使うスポーツであるがゆえに、如何にボールをコントロールし、如何にして相手ゴールを奪うかという発想のもと戦術が考案される。

JFA（（公財）日本サッカー協会）2005宣言に「2015年 日本代表チームは、世界のトップ10のチームとなる。」とある。そのためには、日本独自のサッカースタイル、戦術を確立する必要があり、筆者も今後の研究を通じて、その一助となることを目指していく。まず、その最初として本稿は、サッカーの原点「サッカー（手の使用禁止）の誕生」の理解を深めることとする。

2、世界各地の伝統遊戯

サッカーの起源を探し世界を見渡せば、各地にそのルーツらしき遊戯が見受けられる。

【イングランド】

イングランドにアシュボーンという町があり、年に一度この町では、奇妙なことが起こるといふ。その日が来ると店が厳重に戸締りされ、警察による厳戒態勢が敷かれる。歴史を遡ってみるとその理由がわかる。

イングランドには1000年も前から球技をめぐって乱闘を起こす伝統があった。当時、行われていた民衆のサッカーは2つの町や地区が争うもので、参加者が1000人にのぼることさえあった。プレーヤーと観客の区別はおろか、まともなルールさえなかった。

ヨーロッパのサッカーに関する最初の記述は、1137年に遡る。その競技は「スール」と呼ばれ、敵を競技続行不可能にするか、現場から追い払うことで決着がつく。イングランドやフランス北部で盛んに行われた。民衆のサッカーは大きな人気を獲得し、あちこちに広まっていった。サッカーによる死傷者を記した古い裁判所の記録も残っている。サッカーの長い歴史は死人やけが人で埋め尽くされている。

ケント州アルカムに伝わる古文書には、イングランド初のサッカーによる死者が記されている。1280年、被害者の名前はヘンリード・エリート、対戦相手は武器を持っていた。このような事件が起きたため、1314年には国王・エドワード二世によってサッカー禁止令まで出された。その後も、国王や市長などの為政者の名前で禁止令が幾度となく出されている。そのため、サッカーの開催は、ごく限られた日だけに許されるようになった。

その伝統は現代にも受け継がれている。毎年、決まった日（キリスト教「灰の水曜日」）になると、アッシュボーンの人々は、町の真ん中を流れるヘンモア川を境に、北と南でチームに分かれて対決する。



【イタリア】

ヨーロッパ大陸におけるサッカー発祥の地を名乗っているのは、イタリア中部のフィレンツェである。

フィレンツェを支配していたメディチ家は、その球技をカルチョ・フィオレンティーノと呼ばれる贅沢で華やかな見世物に育て上げた。イングランドと違ってフィレンツェのカルチョは貴族のものであり、一般の人々は観るだけで我慢するしかなかった。カルチョはメディチ家らしい華やかさや上品さに溢れている。カルチョによって初めて観客と選手が明確に区別され、競技を行う場所や選手の数が定められた。選手にははっきりとしたポジションが定められていて、アタッカー・ディフェンダー・ハーフバック・フルバックの4列に分かれて戦う。ゲームの目的はピッチの端にあるラインの外にボールをはじき出すこと。選手はボールを蹴飛ばすことは勿論、手で持っても、パンチしても構わない。華やかな色彩や応援の旗、ユニフォームをサッカーに取り入れたのもカルチョが最初であった。



フィレンツェでは、今でもこの荒っぽいゲームが行われ、人気を博している。年に一度、決まった日にサンタ・クローチェ広場において、当時の衣装をまとうて競技が開催される。

町の伝統競技「カルチョ・ストリーコ（古式サッカー）」である。

サッカーとは言うものの、その内容は戦闘をそのまま競技にしたようなもので、まさに力と力、闘志と闘志のぶつかり合いであった。競技はいたって単純で、1チーム27人、総勢54人でボールを奪い合い、相手サイドの細長い空間（ゴール）に入れば得点になる。手で投げても、足で蹴っても構わず、得点が入るごとにサイドが入れ替わる。ルールというものはないが、倒れている者を蹴ったり、殴ったりすることは反則である。選手はすべて一般の市民達、この日のために厳しい練習を積み重ね、闘志を燃やしてきており、年に一回だけ、勇気と技を見せる晴れの舞台、乱闘は覚悟の上であった。試合は、ピアンキ（白組）、アズーリ（青組）、ロッシ（赤組）、ヴェルディ（緑組）に分かれた4チームの間で行われる。衣装を付けて行うこの伝統的なサッカーを、フィレンツェの人々はとても大切にしている。

【中国】

「文献上で最も古い『球技』の歴史が記されているのは中国である。紀元前 2697 年に中国の皇帝・黄帝が各地から集めた兵士たちの訓練の一環で『蹴鞠（スーキー）』と呼ばれる球技を取り入れたと書物に残されている。これが歴史的に見て最古の球技であり、ボールは鳥の羽や毛髪を丸めて作られたと考えられている。」（アルフレッド・ヴァール（2002）、36 頁）

「さらにこの蹴鞠は徐々に形を変えながら日本へ伝達される。平安時代には貴族の間で『蹴鞠（けまり）』として流行し、日本における起源となっていく。」（アルフレッド・ヴァール（2002）37 頁）

この蹴鞠（スーキー）という球技は、1 チーム 10 人で行われた。スポンサーとなったのは王や僧侶、将軍といった人々であった。本来は兵士たちの運動能力を養うために生まれたものであったが、やがて、娯楽（賭け事）として盛んに行われるようになった。

今のサッカーとバレーボールを合わせたようなゲームで、選手達は 5 m の高さにあるゴールへのシュートを争った。試合が終わると選手には褒美の品やお金が渡されたという。ヨーロッパでフットボールが盛んになる遙か昔、古代中国でこのような球技が行われていた。

【メキシコ】

中南米の文化では、昔からボールが大きな役割を担ってきた。

3000 年以上も前、当時、サッカーは神々のために行われていた。100 を超える競技場がすべて寺院の中にあったことが、そのことを物語っている。サッカーは宗教儀式のひとつだった。神聖な競技に備え、選手たちはサボテンから作った特別な酒を飲む。これは、選手に勇気を与え、苦痛を和らげるためのものであった。マヤ人とアステカ人にとって、丸いボールは太陽の象徴であり、球技は永遠の夜に対する太陽の勝利を確実にするための儀式だった。4 人ずつ 2 チームに分かれ、それぞれが昼と夜、太陽の力と闇の力を象徴する。ゴムのボールは 3~4kg の重さがあったため、競技に参加できるのは、とりわけ、屈強な選手だけだった。宙を舞うボールは、夜空を動く天体を象徴し、選手は腰と尻を使って、石でできたゴールにシュートを決める。しかし、ボールが重いため、難しいだけでなく、極めて危険な競技であった。トラチトリと呼ばれるこの競技は、センターラインにおかれた石の環にゴールを決めるのが目的である。太陽チームが 1 回でもゴールに成功したら、太陽が闇の力を征服したことになり、試合は終了となる。

このように、ヨーロッパ、アジア、アメリカの各大陸において、サッカーのルーツと思われるような球技があり、今も伝統的行事や祭りとして行われている。

3、世界初のサッカークラブ

サッカーの歴史を辿るうえで忘れてはならないのが、シェフィールドという町である。イングランド・北部にあるこの工業都市で世界最初のサッカークラブ、シェフィールド・フットボール・クラブ（以下：シェフィールド FC）が創設されたからである。

このクラブは、1857 年イギリスのパブリックスクールの出身者たちによって作られた。

イングランドの夏のスポーツはクリケットであったが、彼らは冬にで



もできるスポーツを探していた。

シェフィールドFCのニックネームは「the club」、唯一無二のクラブだから「the」がつく。設立後、最初の3年間は他にクラブがなかったので、同じクラブのメンバー同士で試合をしていた。シェフィールドFCは現在、上位のリーグには所属していないが、その名前はサッカーの歴史に深く刻み込まれている。

シェフィールドFCに続いて、沢山のサッカークラブがイングランド北部の工業地帯を中心に設立された。シェフィールドを中心に独自の統一ルールに従ってプレーしていたが、1877年にFA（後述）のルールを採用した。

労働者に娯楽を提供するのが主な目的であったが、20年ほど経つとサッカーで報酬を得る者も現れた。アマチュア選手たちは、お金が絡むことでサッカーが汚れると主張し、大きな議論が巻き起こった。しかし、そのような議論は数年で下火になった。多くのプロ選手を擁したクラブ、プレストン・ノースエンドが登場し、1888～89年にかけてのシーズンで、すべての試合に勝利する大活躍をしたからである。

このようにイングランドはフットボールの発展に大きな役割を果たしてきた。それは今でも変わりはない。

4、アソシエーション・サッカーの成立

1863年のイングランド、フランシズ・モード・キャンベルはいつものようにクラブの友人達とサッカーをしていた。それはかなり荒っぽい競技で、相手を蹴ることも楽しみの一つであった。キャンベルはむしろその野蛮さに魅力をおぼえていた。

一方、ケンブリッジ大学では、サッカーの統一ルールを作る作業が1840年から進められていた。グループのリーダーはチャールズ・マールデンであった。ケンブリッジではサッカーはただの娯楽ではなく、大切な教育の一環として捉えられていた。

イングランドのサッカーはビクトリア朝時代にイートン、ハロー、ウィンチェスターといった名門のパブリックスクールで始まった。しかし、学校ごとにルールが違い、ボールを手で持っても構わないというところもあれば、手を使ってはいけない、というところもあった。そんな状態でサッカーをしていた生徒たちが、その後、同じケンブリッジ大学に入って一緒にプレーをするため、統一されたルールが必要になった。

また、単一大学内の問題だけではなく、クラブ間の対抗試合においても統一ルールの必要性が生じていた。

しかし、フランシズ・モード・キャンベルらは、ラグビー校などで行われていた野蛮で荒っぽいサッカーが好きだった。彼らのルールでは、相手の脛を蹴ったり、足で躓かせたり、ボールを手で持ったりすることが認められていた。

ふたつの派閥で議論が起こった。一方は、手でボールを持ったり、足で相手の脛を蹴ったり、躓かせたりしたかった。ラグビー校のルールである。他方、名門貴族のグループは、彼らと違い、手を使うことには反対だった。相手を蹴ったり、躓かせたりする野蛮な行為は、オックスフォードやケンブリッジの学生にふさわしくないという意見が大勢を占めていた。手を使うことも同様で、大部分の学生は足だけでプレーすることを好んだ。

議事録には、1863年12月1日に両派が集まって開いた会合の記録がある。

フランシズ・モード・キャンベルもそこに出席していた。歴史的な会合はロンドンのパブ「フリーメーソンズ・タバーン」で開かれた。出席者は手を使わないルールを支持するグループと、ラグビー校のスタイルを支持するグループの2つに分かれていた。その夜は、サッカーの歴史を決定づけるターニングポイントになった。ラグビー校を支持するグループは、厳しいルールを定めることに抵抗したが、採決の結果、敗れた。

これによって、相手を蹴ったり躓かせたり、ボールを手で持つことが禁止された。

こうして、1863年12月8日、新しい13のルールが書き加えられ、協会（FA）によって認められた競技規則に基づくサッカー、アソシエーション式フットボール（Association Football）が誕生した。

敗れたフランシズ・モード・キャンベルは、8年後（1871年）に、他の有志達とともに別の協会（Rugby Union）を設立し、ラグビーというスポーツを確立していく。

5、イングランド全土への普及

イングランドでは、1847年工業法の制定によって、労働者が土曜日の午後に余暇を楽しむ時間を持てたことがサッカーの普及を拡大させた。1860年以降、次々とサッカークラブが誕生した。サッカークラブは、教会や大企業が母体になったり、労働者や同じ学校の卒業生が集まったりしてつくられた。それまで貴族に代わって新たな支配層となっていた特権階級者によって支配されていたサッカーは大衆化への道を歩んでいった。1871年にFAカップ（全英選手権）が始まり、これをきっかけに、各地のサッカークラブがFAルールに則って試合を行うようになった。1893年には100近いクラブが参加し、決勝戦には4万5千人の観客が集まった。

チーム強化のために加入した労働者に仕事を休ませ、試合に出場させた。それに対する補償金を支払ったのが、プロ選手の始まりと言われている。1891年には、有名クラブのアーセナルが株式会社としてプロクラブになるなどプロ化するクラブが出てくる。そうして、1888年12クラブによるプロリーグ「フットボール・リーグ」も誕生し、大きな発展を遂げていく。

6、世界への普及

イギリスで誕生した近代サッカーは、「大英帝国」の経済力と軍事力、植民地政策に便乗する形で世界に広まっていった。その伝道師は、イギリス人技師や軍人であった。

1870年 アルゼンチン・ブエノスアイレス

1872年 フランス中北部ル・アーブル

1874年 ブラジル・リオデジャネイロ

1890年 ポルトガル・ポルト、スペイン・ビルバオ、イタリア・ジェノバ

など、大英帝国の繁栄とともにサッカーも世界の港町を中心に伝えられた。

当初はその地に駐留するイギリス人たちが行っていたサッカーを、やがて現地の人たちが行うようになった。「英国人たちが楽しそうにプレーするゲームに、現地の人びとが興味を示すまでには、そう時間はかからなかった。そのひとつの理由には、サッカーという競技のシンプルさがあるだろう。しかし、忘れてならないのが、世界の各地には、ボールを蹴る遊びや、神聖な行事としてボールを使う競技が古くから行われ、民族の記憶として残っていたことがあげられるだろう。」（財）日本サッカー協会・日本サッカーライターズ協議会（2002）7頁とあり、民族伝統スポーツのサッカーの血が近代サッカーによって再び騒ぎ、現地人によるサッカークラブがつけられ、港町から内陸部へと広まり、全国組織へと展開されて行った。

7、まとめ

日本にサッカーが紹介されたのは、1873（明治6）年、イギリス海軍ダグラス少佐によってであった。当時の日本は列強諸国からの脅威におののき、スポーツを楽しむ余裕などなかった。そんな状況の中、欧米文化の一つとしてスポーツが流入した。スポーツは兵士の肉体と精神を鍛錬する道具として利用され、猛練習（しごき）と結びつ

けた野球に人気が集まった。サッカーは諸外国のように発展しなかった。明治から昭和の戦前までは学生野球が、戦後はプロ野球が人気を博した。サッカーは1936(昭和12)年ベルリン・オリンピックで優勝候補のスウェーデンを破り世界を驚かせた。1964(昭和39)年東京・オリンピックではアルゼンチンに逆転勝ちする。そして、1968(昭和43)年のメキシコ・オリンピックで銅メダルを獲得するなど、単発での活躍はあったものの、国民的スポーツとは成り得ず、ワールドカップ出場は夢のまた夢という遠い存在の時代が長く続いた。長期低迷する中、1993(平成5)年にプロ・サッカーリーグの「Jリーグ」が発足し、サッカーが国民的スポーツとなった。Jリーグの発展とともに日本サッカーの強化が図られ、1998(平成10)年フランス・ワールドカップに悲願の初出場を果たした。2002(平成14)年ワールドカップ日韓共同開催を経て、今や日本代表が世界の舞台で活躍するようになった。1990年代に入り長足の進歩を遂げた日本サッカー界である。そして、21世紀に入り世界のベスト10入りを目標に強化が進められている。今、日本サッカーの課題となっているのが、日本人の特徴を生かしたサッカーの確立である。世界各地に伝播していったサッカーは、それぞれの国や地域で民族・国民性を表現したものへと同化していった。

- ・相手陣内に深く切れ込んでクロスボールから空中戦を主体としたイングランド・サッカー
- ・忠実なプレーと強固な肉体、強靱な精神力が特徴のドイツサッカー
- ・守備重視の「カテナチオ」と呼ばれたイタリアサッカー
- ・個人技をベースにショートパスを駆使したラテン・アメリカのサッカー

など、各地域や国で長い歴史が積み重ねられて特徴的なサッカーが生まれた。

イングランドで誕生した近代サッカーは、「手を使わない」という特殊なルールを取り入れたことにより、身長の高低、体重の軽重など身体格差に関係なく、誰もが自分の身体能力を活かしてできるスポーツとなり、世界中で最も人気のあるスポーツとなった。

今、日本サッカー界は明治時代に発展させられなかったサッカーを世界レベルで進化させる時が到来した。筆者も今後の研究課題として、世界で活躍するための「日本人の特徴を活かしたサッカー」について追究していく。

参考文献

- ・アルフレッド・ヴァール サッカーの歴史 創元社 2002
- ・サッカー批評編集部 ワールドサッカー歴史年表 カンゼン 2008
- ・(財)日本サッカー協会・日本サッカーライターズ協議会編 最新サッカー百科大事典 大修館書店 2002
- ・玉木正之著 スポーツ解体新書 日本放送出版協会 2003
- ・多和健雄・長沼 健・永嶋政俊・長池 実・鈴木嘉三・畑山 正著 サッカーのコーチング 大修館書店 1974
- ・忠鉢信一著 進化する日本サッカー 集英社 2001
- ・PIERRE LANFRANCHI, CHRISTIANE EISENBERG, TONY MASON, ALFRED WAHL 著 THE FIFA CENTENNIAL BOOK 講談社 2004
- ・松原英輝・入口豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介(2006年)「フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究(I)―若年層における選手育成システムの現状と特徴―」『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』第55巻第1号 51~70頁(2006年9月)
- ・松原英輝・入口豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介(2007年)「フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究(II)―国立サッカー学院(I.N.F.)の現状及び特徴―」『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』第55巻第2号 22~44頁(2007年2月)